

「若い医師がキャリアを継続するために必要な支援とは？」

講師 東京医科大学医師・学生・研究者支援センター センター長

東京医科大学病院 皮膚科学分野 教授 大久保 ゆかり

1984年 東京医科大学卒業後、同大病院へ入局。

2001年~03年 アメリカスタンフォード大学医学部留学。

東京医科大学皮膚科講師を経て、2012年より現職。



私自身は女性医師の支援のない時代に育って来た。時代が変わったこともあるが、自分自身がして来た要らない苦勞はして欲しくないという思いと、甘えずやるべきことはやるという両方の思いで日頃教授職とセンター長の仕事をしている。研究に没頭した後に 35 歳で子供を産んだ。その後も仕事にあけくれる日々であったが、子供が 7 歳から 10 歳まで 3 年間、子供と二人でアメリカ留学を経験した。その時やっと子供と触れ合う時間を持てたことで、本当の親子関係ができたと思う。親の介護も経験中である。



東京医科大学での育児支援としては、院内保育園（本大学病院に勤務する職員等（学生含む））の子供が対象）がある。開園時間は平日 7:30~19:30（土曜 17:30 まで）であるが、女性医師のみ事前申し出があれば 21:00 まで延長可とのことである。定員増のため（大都会の事情もあり）京王プラザホテル内託児施設と契約している。また、女性研究者支援事業として、東京女子医大と連携し、ファミリーサポートを実施している。他、短時間勤務（病院助教へ身分変更を伴う短時間正規雇用や身分変更なしの医師の育児短時間勤務等があるが、いずれも子供が小学 3 年生までが対象となっている。）、復職支援（学内外問わず受講できるキャリア・復職支援ベーシックプログラムがある）、相談窓口（各科メンターで相談を受け、センターでキャリアコーディネートしている）、医学生・初期研修医に対するセミナー、ワークライフバランスの講演会等を実施している。

女性医師は自覚をもち、強い意志を持って仕事を継続する。男性医師は多様性を理解し、社会で子供を育てる、支えるという観点をもつことが、結果的に医師の確保につながる。

ダイバーシティを考えた医師支援で重要なことは、これを医師自身、その家族、職場で共有する価値観とすることである。